



VOL 52

2014年8月号

発行2014年8月25日

日本山岳会 山岳地理クラブ

URL www.jac.or.jp/doukoukai/

## 偶然なのか

## 福島第一原発と柏崎刈羽原発

遠山元信

2011年3月11日(金)に発生した東日本大震災は、振動、津波、原発という問題で、日本人に多大な影響を残した。その中でも原発の問題は、我々レベルで考えても大会社らしくない事故で、事故時のフローチャートと対応に甘さがあったことは拭いきれないだろう。そもそも全電源喪失と言うのは想定外ではない。我々レベルの零細企業であっても、もし機械が水没したら、大雪に遭遇したらと言う大災害のことを想定して仕事をやり、今回の震災でも発電機を早々に動かし営業を継続した。それが天下の原子力発電所が想定外の災害に見舞われ、全電源喪失というのは大会社の上層部と現場ともに無責任体制が招いた事故というほか無いだろう。

そもそも大地震の時に原子力発電所の原子炉を停止しても全電源喪失しないで維持できるのかと言うことが疑問提起されていた。『週刊エコノミスト』(2004年12月7日発行)「地震と日本経済」特集号の中で、技術評論家の桜井淳氏は「日本の原発はまだ一度も大地震を経験した事がない」を執筆。その中で「地震計の信号により...緊急停止するようになっている。問題は停止後、炉心の崩壊熱を安全に除去できるように、冷却系配管やポンプ等の機器の

健全性が維持でき、なおかつ、ポンプ等に供給する交流電源が確実に確保できるかどうかにかかっている。」とすでに指摘されていたのである。大震災より6年前に技術者によって指摘されていたのだから、想定外なる言葉で言い訳していると考えざるを得ない。

そこで福島第一原発というのはどこにあるのか、誰に聞いても詳細な場所を知る人はおらず、50万分の1『関東甲信越』の地図を広げて見ても福島第二原発らしきところに発電所マークがあったが、福島第一原発は地図上には発電所のマークがなく、Yahooの福島県内の地図から当たりを付けて50万に記録した。その地図を広げて眺めていた時「えっ、まさか」という思わぬ問題が浮上した。

そこでコンピュータの電源を入れ、カシミールをクリック、画面上に「ウオッチず」から2万5千分の1『岩城双葉』図幅内の福島第一原発のところを表示させた。その状態で地図を西へ延々と移動したところ、やはり出てきた。2万5千分の1『宮川』図幅内に柏崎刈羽原発が存在していたのである。ということは、福島第一原発と柏崎刈羽原発が同緯度にあったことになる。これは偶然なのか、気になりだした。そこで詳細に位置を確認してみた。



上図内に記した赤線が北緯37度25分40秒である。こんな位置的關係に存在していたのである。これを知り合いに話してみたが、「えっ、まさか」、「偶然だよ」が圧倒的だった。

こんな国家的な大規模な建設には、もちろん裏で政治家が動いている事はだれにも想像でき、柏崎刈羽原発は某元首相の実家の傍なので火を見るより明らか、福島はバックにだれが動いていたのかは判らない。東日本大震災時に原発から何キロまでは自宅待機と言う話も聞か

れたが、科学屋の知り合いは何故か80km以上離れなければ危険だと主張、アメリカ在住米国民にやはり80km以上離れると指示していた。そこで東京駅から福島第一原発までは何キロだろうかと考えカシミールで詳細な距離を測ってみた。その結果、福島第一原発まで223.87km、柏崎刈羽原発まで220.28km、またもや220kmと言う数字に驚く。

これも偶然だろうか、それとも規模が大きい原発だから東京からこのくらい離しておかなくては危険だと考えての

結果なのだろうか。さらに福島第一原発と柏崎刈羽原発間の距離を測ったところ、なんと 215.77Km。となると東京から、ほぼトライアングルの地点に原発を設置したのではないかと考えざるを得なくなり、政治家の存在は薄れてしまった。

福島第一原発と柏崎刈羽原発が同緯度、そして東京からの距離と原発間がほぼ同じ距離と言うのは、偶然なのか、もしもの事故を想定してのトライアングル配置距離なのか、思わぬ疑問が浮上してきた。

(2013 11 30)



\*\*\*\*\*

**行ってきました**

**山行報告**

**晃石山・太平山**

**首都圏自然歩道・関東ふれあいの道 栃木県**

**平野 彰**

平成25年7月20日 今回は1月の首都圏自然歩道関東ふれあいの道、栃木県25番目の「稜線をたどるみち」を歩くことになった。天気は高曇りでこのところの暑さ続きからはやや涼しい感じた。10時48分近藤善則、今井秀正、高田容子、平野彰の4名が JR 両毛線岩舟駅へ集合、出発間際に川口章子がタクシーで到着。総勢5名のメンバーだ。近くに見える岩船山は、江戸時代から始まった岩舟石の採掘と3.11の地震で山体が変わってしまい、残念ながら舟形のイメージとは程遠い感じた。山頂にある高勝寺は一大霊場として信仰を集めている。

暫く線路沿いの舗装道路を東に向かい、さらに緩い坂道を北上すると、10時30分鷲神社に到着。桃山時代の建立で天日鷲命(あめのひわしのみこと)が祭神との案内板がある。道路反対側のため池は水が涸れ、ゴミ捨て場のような底をさらけ出していた。この池の北側に地図には無い山道があり、女性が一人あつという間に追い越して行った。雑木林の中は涼しげで、10分ほど進み、



車道を横断し本来の登山道に入る。樹林のなか、急な丸太の階段が延々と続き、喘ぎながらの登りだ。11時50分馬不入山(346.3 ㍎)に着く、数人の先客あり。ベンチの前の三等三角点は上部が欠けていて、誰の補修かセメントで三等の文字までうめられている。ここで大きめのヤマユリを眺めながら早めの昼食をとることにした。休憩後あまり展望もない道をひたすら登る。12時50分桜峠到着。よく手入れされた東屋には先客 5、6人が休憩していた。この辺りには山桜の自然林が広がり、そこから桜峠と呼ばれるようになったらしい。道の傍らにあった案内板には、晃石山と馬不入山の間にある峠で表東山道と裏東山道の連絡路で昔は岩舟や葛生方面からの大切な道。また皆川城が上杉勢に攻められ落城の際、一人の武士が荷物を桜峠の繁みに埋めたが、その後里人では金の鹿の置物を埋めたといった民話も記入されていた。地元の男性が我々に、この峠は弘法大師、伝教大師など古来名僧高僧の往来もあ

った、地元では最近では桜の植林を進めているなどと説明してくれた。程なく晃石山の方にヘリの音が聞こえてきた。我々と逆方向から下りてきた人の話では、中年の男性が倒れていたとのことで、其の救助に飛来したようだ。晃石山への登り道は、道の真ん中に手すりのある急な石段が直線状に続く、窪地のうへ両側の樹林のため展望も風もない道をひたすら登るのみ。ヘリの音が増々近くなり、石段が終わり、歩きやすくなったところで、漸く晃石神社(14時)へ着いた。ヘリは男性を収容し飛び去った後だったが先行の今井さんが、其のヘリをカメラにおさめていた。栃木消防署からの救助隊員十数名も間もなく下山していった。この神社は山岳信仰のもとに建てられたが、当時ここに鏡石(神石)があり、日夜恍々(こうこう)と輝いていたことにより、綾都比之神(あやとひのかみ)として敬われたとのこと。神社と鳥居の間は一寸した広場で、中央付近に大きな岩があるが、これが鏡石なのかは不明だ。社殿の裏側を登る

こと10分ほどで、晃石山山頂に着いた。奥宮の前には、一等本点の三角点だが、明治11年から15年の5年間45点が竣工した「関八州大三角測量」及び「大三角測量」の一つで、内務省地理局が設置し、その後参謀本部陸地測量部により明治35年12月27日に再設置されたものである。

ここから太平山までは緩い下りで、攀りそうな足にとってはありがたい道だ。

今回のコースは全体的に展望があまりよくなかったが、天候によっては、遠く富士山から、日光連山、筑波山まで見えるそうだ。晃石山と太平神社のちょうど中間に、大中寺への分岐道があり、そこのベンチで小休止。栃木の町並を眼下に見ながら、なぜか太平山の頂上をまいて、神社直行となった。15時30分太平神社到着。山の中とは思えぬほど広い境内を有する。天長4年(827年)慈覚大師の創建といわれる。ここまで無事だったことへの御礼をこめ参拝を済ませると、ここからは長い石段の下りだ。朱塗りの随神門をくぐりさらに石段を下ると、石畳みのあじさい坂。さらに右側には複雑な瓦屋根の連祥院六角堂がある。幕末水戸藩の天狗党が、太平神社に立てこもり、のち筑波山に引き上げたあとも、一部過激派がこの連祥院を宿舎として、軍資金拠出に応じない住民を惨殺しさらに、栃木町を焼打ち、町の大半が焼け落ちてしまった。16時20分国学

院栃木短大前のバス停着。すでにバス待ちの学生ら数十人が列をつくっていた。途中で仕入れた缶ビールでのどを潤し待つこと 10 分程。到着したバスの運転手が真っ先に我々を載せてくれたのは意外だった。栃木市内を流れる巴波川(うずまがわ)河畔に建つ豪商の蔵屋敷を過ぎると間もなく、栃木駅に到着。居酒屋の開店時間には少し早かったが一軒のみ駅舎の中の漁民が、開いていて、時間の経過を忘れるほど会話の盛り上がった打ち上げとなった。

参加者5名(近藤、今井、高田、川口、平野)

**行ってきました**

**都心での読図**

**甲州街道に沿って**

**江戸城への尾根道と几号水準点探索**

**近藤善則**

山岳地理クラブの活動テーマの一つに、読図研修や、地図作成の基になる測量の歴史を学ぶという課題がある。2007年9月に第一回研修として都内の測量遺跡(几号水準点など)を訪ね歩き、都心の地形は意外なほど起伏に富んでいると感じた方が多かった。また一等三角点や基線網の探索なども、関連したテーマのひとつで、かならずしも山岳地域とはかぎらない広義な地域の探索を行ってきた。

今回は日本橋から甲州街道に沿って、几号水準点(きごうすいじゅんてん)や江戸城付近の地形観察を、旧版地形図と現在の地形図を対比しながら歩くという、都心の探訪ウォーキングを実施。集合地、日本橋三越本店ライオン像前に9名のメンバーが集った。



日本橋 三越前

資料として、明治末期測量の仮製1万分1地形図「日本橋」「四谷」と現行の1万分1地形図「日本橋」「新宿」を使用し、新旧の地形を対比しながら、日本橋から、甲州街道沿いを中心に、第一の宿場、内藤新宿を目指した。梅雨明けしたばかりの猛暑の中、熱中症が心配されたが、各自それぞれ事前の対策は万全のスタートである。

注: 几号水準点については、AGCレポートvol-1のコラム、第1回読図研修は同vol-3をご覧ください

**日本橋**

江戸時代に五街道が整備され、そのいずれもが日本橋を基点とするが、北に向かうのが中山道、日光街道、奥州道 南に向かうのが東海道と甲州道中。甲州道中は一丁目の交差点から西に曲がり永代通りを呉服橋から大手門方面に向かう。

外堀通りを右に曲がったところが一石橋。この橋の南詰西側に迷子石がある。「しらする方」と「たつぬる方」とが両側に刻まれており、江戸時代の迷子の告知板だそう。この石標の正面に「満よい子の志るへ」(迷い子のしるべ)とあり「へ」の下に几号「不」が鮮明に刻まれてある。



迷子石の几号水準点

次に永代通りをまっすぐ西に、山手線のガードを潜り大手町から皇居大手門に向かう

**大手門**

内堀の橋を渡ったところが大手門。左側に警官の詰め所があり、右側の扉外側の石垣の下段に内向きに薄く几号が刻まれており、やや見つけにくい。監視の警官は「この連中はなにをしているのか」と怪訝そうに見ていた。北野氏のファイルに挟んでいた葉っぱに気付き、皇居内の植物は一切持出し禁止の旨、注意されていたが、結構細かいところまで目を光らせているのだなあと、納得(北野氏は皇居の葉っぱではなく、自宅から持参した物だと釈明していた)



大手門 外門右側の几号

次に内堀通りを南へ、東京駅正面からまっすぐ皇居に向かう凱旋通りのお真ん中を通り、日比谷通りを日比谷公園に向かう

**日比谷公園**

公園に入ってすぐの心字池の中頃の畔に2mほどの亀の甲に似た平たい石がある。通称「亀石」の水平面に几号が刻まれてある。

几号は垂直に刻まれた「不」の水平の「一」が水準の高さを示すもので、垂直に刻まれることはない。これは牛込門枳形石垣にあったものを移設したものとされており、40.26尺という記録が残されている。

そのまま、日比谷通りと平行に公園内を進み、交番の裏の烏帽子石へ。草むらの中に几号を探し当てる。この石ももともと別の場所にあったものを移設したそうだが、こちらは垂直にもっともらしく刻まれてあった。後で調べたところ、この几号は 市ヶ谷門枳形石垣(62.65尺)であったそう。

思った以上に時間の経過が早く、すでに昼時である。公園内の「松本楼」か「なんぶ亭」で食事! という声も拳がったが、結局は野外音楽堂横のグリーンサロンでの軽食となった。タイミングよく、我々の後に団体さんが押し寄せ満席でごった返していた。

ひと時の休息のあと、次に桜田門に向かう

**桜田門**

桜田門の几号は、内門の内側石垣の地表から5cmぐらいに刻まれていた。(記録では23.96尺)



桜田門 内門

その先、内堀通りの桜田濠沿いを進むが、日陰に欠しく、汗をか

きながら次の目的地、半蔵門を目指す。

**水準原点**

その前に水準原点を尋ねることにし、国会議事堂前の庭園に向かう。2007年の探索の時にも訪れたが、厳かな石造の小さな建築物に収められているもので、当日持参した旧版地形図にも陸軍参謀本部、陸地測量部がこの地にあったことがしっかり記されている。

さらに三宅坂から次第に高度を上げ、半蔵門に近づく。

**半蔵門**

半蔵門の両側の濠は深く、半蔵濠の水面の標高は15.98mある。ところが今まで歩いてきた桜田濠は最低標高の日比谷濠とほとんど同じ程度(1.43m)。つまり半蔵濠と桜田濠の水面の差は14.55m。ダムのような落差であると云われる所以である。それは、皇居の濠の水は、主に北側の神田川(荒川水系)から取水し、僅かに時計周りに流れているとことが理由のようだ。南側が多摩川水系からという説もあるが、いずれにせよ、この水位の差は、何かに利用できないものかと思う。

その半蔵門は門の手前、内堀通り沿いで封鎖されている。半蔵門の土手は通行不可なのである。記録では半蔵門外石井杵(92.59尺)に几号水準点が存在するようなのだが残念ながら確認は出来ない、遠くから門の写真を撮るだけであった。

武村公太郎「日本史の謎は「地形」で解ける(PHP文庫)によると、半蔵門は江戸城の正門だった！と推察している。ここからまっすぐ西(新宿方面)が甲州街道であり、しかも尾根道なのである。江戸時代の古地図にも「御城」の表記が甲州街道を正面に据えていることから、かなり頷ける推察だ。



ゲートの先の半蔵門

**尾根道**

さてその正面の尾根道(現在は新宿通り)を平河天満宮に立寄りながら四谷に向かう。確かに両側は坂道で、尾根沿いを歩いていることが実感できる。

四谷見附をクランク状に旧道を辿ったところで、あまりの暑さに我慢できず、涼を求めひと休みとする。もちろん、ちゃんと冷房の効いた冷たい泡を含んだ飲物をオーダーしたことは言うまでもない。

**四谷界限**

すこし英気が戻ったところで、同行の高橋嬢に地元界限の案内をお任せ。西念寺の服部半蔵の墓や四谷怪談の於岩稲荷などを見学。四谷の地名は四つの谷があったことからののか、四つの家があった事からののか、2つの説があるようだ同う。



西念寺・服部半蔵の墓



お岩稲荷

**大京町路傍**

この先、予定通り新宿に向かうか、このあたりまでで今日はおしまいとするか、多少意見の分かれるところであったが、とにかくもう一つ残った几号水準点を確認してから決めようということになり、新宿御苑南端、大京町路傍の独立標石に向かった。これは上西氏のHPに記されていた標石で、20cm四方、高さ20cmの花崗岩の上面にはっきり几号標が刻まれているものだ。地理寮雑報に記されている独立標石で「青山六道辻」にあったものが何かの理由で移動したのではないかと氏は推察している。



大京町の几号独立標石

今回の探索はこれで終了とし、いちばん近い千駄ヶ谷駅に向かうことにした。やや早めの時間で、お店がまだ開いていない為、なかなか最後の重要なメにありつけなかったが、ようやくたどり着くことができ、頂上を極めた感じがしないでもなかった。

参加者: 9名(北野,平野,今井,片野,鶴田(泰),高橋,川口,小島,近藤)

**参考**

日本山岳会所蔵: 1万分1仮製地形図(東京近傍、日本橋・四谷・中野) M44製、現行図は1:10000地形図(日本橋・新宿)H11製

竹村公太郎著「日本史の謎は「地形」で解ける(PHP文庫)第5章「半蔵門は本当に裏門だったのか」

竹内正浩著「地図と愉しむ東京歴史散歩」(中公新書)

HP: 都区内の几号水準点を訪ねる



仮製一万分一「四谷」明治43年 日本帝国陸地測量部・発行(部分)

AGC レポート vol-52 2014年8月25日発行  
 発行: 日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)  
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 日本山岳会 気付  
 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441  
 編集担当: 近藤 E-mail: info@hikarikon.com